



年間購読料(送料込み)1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

人間が変化? 野性が変化?

ブックトークのつもりが...

店の前の歩道と車道の境界の植え込みにツゲが植えられている。そのツゲに小さな黒い実がなっている。これをめざして、今冬はメジロがやってくる。メジロは毎年やってくるわけではなく、2〜3年おきにやってくるようだ。田舎とはいえ、駅前の通りにまで山から下りてくるのは、今年は山の木の実が少ないのだろうかなどと、勝手に想像したりしているのである。

年によってはヒヨドリもくるが、今年はまだその姿を見ていないし、鳴き声も聞いていない。メジロを見ていて、ふと、子どもの頃、山へメ



ジロ捕りに行ったことを思い出した。それは、罔のメジロをタケカゴに入れて、メジロがやってきそうな枝にこれを吊り下

げ、そのカゴや近くにトリモチをつけたえだを仕掛け、その枝にはミカンを輪切りにして突き刺しておくのである。罔のメジロのさええずりに誘われて野性のメジロがやってくる。近くに隠れていてトリモチにメジロがかかると飛び出していき、かかったメジロを捕獲するのである。

勿論、今はこの方法で野鳥を捕獲すれば違法である。

これを思い出して、ミカンを輪切りにして枝に突き刺して置いたら、すぐにメジロがやってきて。夢中でミカンをついばみだした。そんなメジロを眺めるのがこのところのぼくの楽しみである。輪切りにしたミカンはきれいに食べ(吸い)尽くされている。毎朝1個のミカンを2つに輪切りにして枝に突き刺しておくのが日課になった。

おもしろいことに、このメジロがミカンをついばんでいる2メートルと離れていないところを歩行者が行き来しているのである。そんなことなど気にする様子もなく、メジロはミカンを夢中になってついばんでいる。一方、歩行者も誰一人、そんな近くに野鳥のメジロがいることには気付かないのである。

ところが、意識をメジロに集中しているぼくが店のドアを開けると、瞬間メジロは飛び立ってしまう。メジロはぼくの殺気を感じ取って飛びたってしまうのだろうか?

「殺気」を感じとるで思い出したが、動物写真家の宮崎学さんは近著『ツキノワグマ』(偕成社 1470円)の中で、近ごろの日本人はあまりにも野性に対しての防衛本能が鈍感になりすぎていると書いている。これは最近クマに人間が襲われ事件に対して言っていることだ。

これは宮崎さんが自分の住む伊那谷で長年野性動物の写真を撮り続けるなかでさまざまなことを観察し考えての発言である。

山菜採りやキノコ採りに山に入るといことは、

当然人間の方がクマなどの野生動物のテリトリーに入っているのであるから、それなりの覚悟と心の準備をして入るのが当然なのに、今の人はこの点が無防備であるというのだ。

ぼくは、20年以上も溪流釣りで大井川の源流帯に入っていたが、野性のクマに2度、イノシシに1度遭遇している。クマに遭遇したときは2度とも4人の釣り仲間が一緒だったので、恐怖を感じることは無かった。

1度は本当に可愛い子グマとの遭遇だった。大井川東俣を遡行中で、まもなく池の沢というところまで来たときだった。

釣り仲間が「クマだ！クマだ！」と声をだしたので、見ると2メートルぐらい先の水辺を走る子グマが見えたのである。その子グマは瞬く間に走って柳の林に駆け込んでいった。その子グマの素早さに驚いたものだったが、ぼくらはその場に30分ほど留まっていたのである。

子グマの近くには、母グマが必ずいることを知っていたからね。しかし、だれもそこで釣りを中止して帰ろうとは思わなかった。その後も遡行を続けたのである。

ぼくは、ここを単独で釣り登ったことが何度もあるが、幸いなことに単独行の時は、クマとの遭遇は無かった。果たして一人の時に出会っていたら、このときのような態度ではいられなかったと思う。おそらく、ただちに、釣りを中止して逃げ帰っていたことだろう。

イノシシとの遭遇の時は怖かった。やはり一人で寸又川の支流の大間川を遡行して、かなり奥まで行ったのだが、釣果がかんばしくなく予定を切り上げて、引き返してきたのである。

川のカーブを曲がったとき前方十数センチにでつかいイノシシがいるではないか！ たまたまぼくが風下から下ってきたのでイノシシも気付かなかったのだろう。

ぼくもびっくりしたが、イノシシの方もおどろいたにちがいない。お互い見合っただけなかったのである。

ぼくは瞬間襲ってきたら、手に持っていた途中で拾って杖代わりにしていた木の枝で戦うしかないかと考えたのである。そのときは恐怖と言つより驚きの方が強かった。

だが、次の瞬間、イノシシは左岸側のガケを登ろうとしたのであるが、ガケがあまりにも急斜面だったから、登ることができず、「ガリ、ガリ」と地面をひっかくだけだった。

イノシシはつぎに流れの中に飛び込み、と言つてもそこは浅い瀬だったので走って流れを横切り、反対側の林の中に消えていった。

ぼくはその間、身動きもせず、(というより何もできずに)ただこれを見ていただけである。イノシシが去った後に、恐怖心が湧いてきた。

その後、ぼくは曲がり角の手前に来るたびに、かぶっていたヘルメットを右でたたいて音を出しながら沢をくだったのである。そのときのイノシシの大きさは、今月号

のこのものどもの「まゆとうりんこ」に出てくるお母さんイノシシぐらい大きかったとぼくは思っているのだ！

ところで、宮崎さんは、以前はクマは人間の「殺気」を事前に感じ取り、遭遇することを避けていたと言っている。

宮崎さんがこの本を出したのは、昨今クマが人里に出てきて人間を襲ったりなどということが多いので、報道されるので、長年野生動物と接してきたの自分の経験や考えを表すためだそう。

音に敏感なクマは、人が鈴や笛を吹いて山に入ればクマの方が避けるというのが通説であるが、昨今のクマは、大型トラックがうなりをあげて往来する中央高速のすぐ脇のクルミの木に登って、悠然と時間をかけて実を食べているのだそう。

これはクマの方が学習をして人や音を怖がらなくなっている結果だと言っているのである。ましてや、笛を吹く程度ではクマは逃げることはないという。

これは人間のことを学習した新世代のクマが増えているからだ。

この本を読んでいてぼくが特に気になった点は、近頃キャンプ場が山の奥にもあるが、キャンプに来ている都会の人間は、自分たちがクマのテリトリーに侵入しているという認識が全然ないことに宮崎さんは危惧しているのだ。

新世代のクマというのは、人間のいるすぐそばに出没しているが、それをわれわれが感じ取れないのだという。

クマはキャンパーが出した食べ残しのゴミを目当てに来るのだそう。この味を覚えてしまったクマは少々のことでは驚かないし、諦めもしないというのである。キャンプ場の方でも近くにクマが出るのが知られればお客がこなくなるから、余り騒ぎたてないのだそう。

さて、ここまでできて思い出したのは、シートン動物記の1冊『ジョニーベアー』(今泉吉晴・訳 945円 福音館書店)の主人公の子グマのことである。



ベアーは、そこに建つホテルの残飯で餌付けされたために自立できないみじめなクマになってしまった。

このことを動物学者である、訳者の今泉さんは後書きでこう書いている。

「野生動物のくらしを守っているはずのイエローストーン国立公園が、クマに人間のぜいたくな食べ物の残りをあたえ、甘やかす、”野生”をうばって自立できなくするという、新しい問題を生んでしまった。シートンは、ゆたかなように見える環境が、実は野生動物にみじめな、貧しいくらしを強いるという問題に、早くも気づいたのです。それから100年たって、野性のサルをみじめな環境に追いやったわしたちは、シートンが気付いたことの重大さと、するどさ

に驚嘆させられます」

百年も前にシートンは人間が安易に野生動物を餌づけすることの愚かしさを見抜いていたとはおどろきだ。

クマの人里への出没は人間と野性の間に、多くの問題があることを提示している。

さて、宮崎学さんは森の写真動物記1として『けもの道』(2100円 偕成社)も同じに出した。

この本は、中央アルプスの高山から中腹にいたる、日本の豊かな森に生息する野性動物たちの姿を、それぞれ高度の違ったけもの道にデジタル・ロボットカメラというものを設置して、そこを通る野生動物たちの姿を1年間通して撮って、説明した本である。



面白いことに、動物たちはなるべく歩きやすい道を歩く習性があり、クマの歩く道は広くしっかり踏み固められているので、他の動物たちも頻繁に利用していること。や、人間の造った道も、歩きやすいためけもの道として結構利用されているのだそう。

けもの道といえは、ぼくは以前けもの道にツェルトを張って、エライ目に遭ったこ

とがある。

それは、ある夏、釣り友とイワナを釣りながら塩見岳へ登ろうと、出かけた時のことだ。大井川西俣をたどり、さらに中俣を詰めて最後は藪漕ぎをして登山道へ飛び出し塩見岳にいたるといつ計画だった。

このとき釣り友は魚止めで40センチを越えるイワナを釣ったのであった。釣り終わった後、ぼくらは水線を越えてヤブこぎをして、登山道を目指したのである。

ところが高度がたくなりハイマツ帯になったのだが、一向に登山道が出てこない。高度計とコンパスと地形図を見れば、そこはもう既に目指した登山道を超えているはずである。だが、一向に登山道とぶつからない。日が落ちてきたので、やむ終えずぼくらは少し下って平らな斜面にツェルトを張ってビバークした。疲れていたので早々シュラフに入って横になった。

ところが、夜中にツェルトの外のもの音で起こされてしまったのである。その物音は、シカのように、数頭いるようだった。足音と鼻息が鳴き声は、どうやら怒っている様子だったのだが、外に出てみるのはおっくうだし、ちよっぴり怖かったのでテントの中から「うるさい！」って声をだして、物をツェルトの壁にぶつけたらシカたちは諦めて戻ったよう。

朝起きてみると足跡があつたが。考えて見ると、われわれがツェルトを張ったところは、けもの道のご真ん中だったようである。さぞやシカにとっては迷惑だったにちがいない。

ねー、この本読んだ

『まゆとうりんこ』(富安陽子・文 降谷
なな・絵)



こどものとも2月号(611号)シリーズ

4作目ーやま
まんばのおす
めまゆのおは
なしー。やま
んばの子まゆ
は迷子のうり
んこ(イノシ
シの子)に出
会って、がぜん母性本能に目覚めてうりん
この世話をやきます。でもうりんこは本当
のお母さんのもとへ・・・ちっちゃな子
も自分よりちいっちゃんな子がこまっている
のを見ると助けたくなるんだね。

ところでぼくはこの絵本を読んでいて、
変なことが気になりました。この絵本には
シロツメクサ、ムラサキツユクサ、ハルジ
オンと草花の固有名詞が出てくるのですが、
これらの草花は同一時期に咲くものでしょ
うか?それにツユクサでなくムラサキツユ
クサは広く一般に分布している草花なので
しょうか?ここ静岡ではムラサキツユクサ
でなく、ツユクサはけっこう目にします

ね。

さらに、これらの草花はいつたいどんな
ところに咲いているのでしょうか?やまん
ばの住む山奥の植生と矛盾することはな
いのでしょうか?

もう一つアシビという木もでてくるので
すが、これは描かれている絵からアセビ
(馬酔木)のことと思いますが、何故アシ
ビと表したのでしょうか?

アシビはアセビの方言?気になったので
植物図鑑とインターネットでしらべてみた
ら、アシビ=アセビとインターネットには
載っていたが、植物図鑑『原色植物図鑑2』
北隆館にはアシビの表記は無かった。ちな
みに植物図鑑の和名索引で「アシビ」と引
いても出てきません。

マア、アシビでも間違いではないことは分
かりましたが、何故一般的なアセビを使わ
なかったのでしょうか?作者はアシビに何
かこだわりがあったのでしょうか?

はたまたアセビの花と先の草花とは花の
時期がいつしよなのでしょうか?気にしだ
すと次から次に疑問が湧いてきます。本当
に、ささいなことですがね。

もちろん、科学の本ではないのですから、
そこまで正確にしなくても良いかもしれま
せんが、いくら子ども本だといっても何
事であれ、辻褄を合わせることは必要だと
おもいます。

もっとも、山奥に棲むというイノシシや

クマが人里に出没するきょうこの頃です
から、山奥の住人のやまんばの子、まゆが
人里に出てきて、シロツメクサのじゅうた
んにうりんこと昼寝したとしてもおかしく
ないのかもしれませんがね。

エンターテインメントな作品2編紹介します。
『獣の奏者 1 闘蛇編』 『獣の奏者 2 王
獣編』(上橋菜穂子・作 1575円・1
680円 講談社)

1巻では無敵の闘蛇の奏者であった母が
闘蛇が何匹も死んだ罰として湖で処刑され
る。娘のエリンは母を助けようとしてとし
て巻き添えになる。これを母は見過こせず、
大罪を覚悟で掟を破り笛を使って野性の闘
蛇から、エリンを救う。

2巻では無敵と思われた闘蛇を簡単に食
い殺してしまう王獣とで会い、エリンはこ
れを慣らしてしまう。しかしそのことで、
権謀術の渦巻く王国の争いにまきこまれて
いく・・・これはまだ続くと思われる。

『氷原の守り人』(澤見彰・作 1890
円 理論社)

時代はアラスカのゴールドラッシュ、人々
は一攫千金を夢みてノーム行きの船に乗り
込んだ。何とその船は地獄への直行便だっ
た。一人逃れた主人公一樹はイニユイの老
人に助けられる。老人に狩りを習いながら
金鉱に囚われた仲間を助けに・・・。